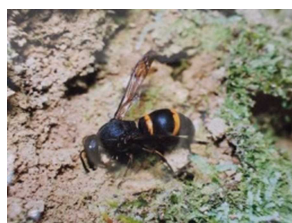
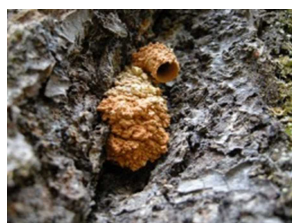


煙？が出る

1. エントツドロバチ

泥で作った焼き入れ前の小さな徳利が草木についているのを見かけますが、このようなものを作るハチをドロバチといいいます。

これらの中でも変わっている巣を作るのがエントツドロバチと呼ばれる種で、巣は狩ってきたガの幼虫を餌として置き幼虫を育てる場所です。出入り口として作る下向きのトンネルが煙突に見えます。



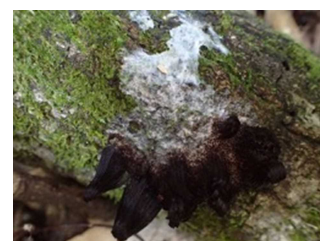
母バチは、写真のようにスズメバチほどは黄色と黒の目立つ警戒色ではありませんが、毒針で青虫を麻酔して幼虫の餌とする狩人バチですから刺されたら危険です。しかし、狩人バチは単独で行動し、人を襲うことはありません。捕まえないかぎり大丈夫です。

泥が必要ですので、遊歩道の土が出ているような場所で泥取りをし、灯籠の隅や石の窪み、石崖の隙間のような場所に巣を作ります。幼虫の成長に合わせて何度も餌を運び入れるので、出てくるところを見ることもできます。給餌の必要がなくなると、煙突を取り払って穴を塞ぎ、翌年の夏に子どもが羽化して出るまでそのままです。

集団で営巣する場所もありますが、打吹山にそのような場所はなく、鎮霊神社周辺が一番巣の多い場所です。

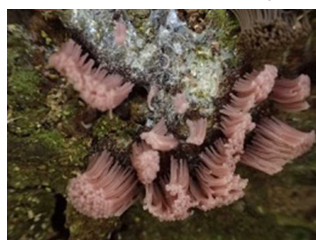
2. ムラサキホコリ

変形菌類といわれ、以前はカビやキノコと同じ菌類とされてきましたので、ムラサキホコリカビともよばれます。長さ1.5cmくらいの濃紫色をした柄付きの細長い袋が毛のように密生して付いている朽木などが遊歩道で見つかります。日当たりが悪い、湿り気の多い場所で注意して見てください。気温が高い時期の雨の降った翌日が出現の時です。この袋は繁殖のために飛ばす胞子が入っている子実体と呼ばれるもので、触ったり、風が吹くと黒っぽい煙が流れます。大量の胞子です。ホコリカビとよばれたのは、このせいです。



胞子が成熟した子実体

硬い子実体に変化する前は、アンパンくらいの大きさ（これは大小あり）のベトベトのゼリーの物体です。ゆっくりと形は変わりながら移動します。変形菌とよばれたのは、この変形体からです。じつは変形菌はたくさんの細胞が集まった巨大なアメーバなのです。落ち葉や石の下でバクテリアなどを食べています。子実体を作って高い場所で胞子を飛ばすときに姿を見せます。案外早く変身するため、経過を見る機会は少ないのです。写真の白い部分が変形体の痕（ナメクジの歩いた痕のようなもの）です。雨に会わなければ1週間以上も子実体は形を残しています。



初期の子実体